

房総半島中部に分布する上総層群下部-中部更新統の石灰質ナノ化石層序と古海洋環境
Calcareous nannofossil biostratigraphy of the Lower-Middle Pleistocene in the Kazusa
Group, central part of the Boso Peninsula, and estimated sea surface environments

*渡辺 賢人¹、亀尾 浩司¹

*Kento Watanabe¹, Koji Kameo¹

1. 千葉大学理学研究科地球生命圏科学専攻地球科学コース

1. Department of Earth Sciences, Division of Geosystem and Biosystem Sciences, Graduate School of
Science, Chiba University

本邦中部太平洋側に位置する房総半島には第四系の海成堆積物から構成される上総層群が分布する。露頭条件が良いことや化石を多く含むことから、岩相層序学的研究や古地磁気層序学、テフラ層序学、微化石層序学のような年代層序学的な研究が行われてきた（新妻, 1976; 佐藤ほか, 1988; 五十嵐, 1994など）。このうち下部-中部更新統に相当する国本層には、ブリュンヌ/松山境界（Matuyama/Brunhes Boundary: MBB）が記録されており、GSSP（Global Boundary Stratotype Section and Point）模式地の有力な候補のうちの一つとなっている（Kazaoka et al., 2015）。そのため、前期-中期更新世の正確な年代を決定するために、より詳細な年代層序の検討が必要であると言える。ところが、国本層に産出する石灰質ナノ化石は、必ずしも高い時間解像度で解析されているわけではない（佐藤ほか, 1988）。そのため、当層準における石灰質ナノ化石層序は十分に検討されておらず、化石基準面も明らかにされていない。よって本研究ではMBB相当層準の石灰質ナノ化石基準面を明らかにするとともに、群集変化に基づいて同層準堆積当時の北西太平洋の表層海洋環境を推定するために、国本層の石灰質ナノ化石の検討を行った。検討した66試料からは、10属19種の石灰質ナノ化石が産出した。検討層準を通じて種組成に変化はないが、そのうち、小型の*Gephyrocapsa*属が多産する層準がMBB直上に位置し、この多産イベントは顕著である。この層準のイベントはイタリア南部のMontalbano JonicoやValle di Mancheでも指摘されていることから（Girone et al., 2013）、グローバルに追跡可能なイベントである可能性がある。さらに、寒冷な環境指標種である*Coccolithus pelagicus*や温暖な環境指標種である*Umbilicosphaera sibogae*の産出には逆相関する関係が見られた。層位分布をみると*Umbilicosphaera sibogae*が全層準を通して増減を繰り返す傾向が見られることから、黒潮水域と混合水域の北上、南下が交互に起きていたと考えられる。

引用文献

Girone et al., 2013, *Palaeogeography, Palaeoclimatology, Palaeoecology*, 371, 62-79.

<http://www.elsevier.com>

五十嵐, 1994, *地質学雑誌*, 100, 348-359

Kazaoka et al., 2015, *Quaternary International*, 383, 116-135.

<http://dx.doi.org/10.1016/j.quaint.2015.02.065>

新妻, 1976, *地質学雑誌*, 82, 163-181

佐藤ほか, 1988, *石油技術協会誌*, 53, 475-491